

遊牧王朝における鉄器生産の研究

ロチン・イシツェレン

モンゴル科学アカデミー考古学研究所

はじめに

モンゴル高原には匈奴、鮮卑、柔然、突厥、ウイグル、モンゴルといった遊牧王朝がつぎつぎに成立した。寒冷乾燥という劣悪な自然環境の中から、如何にして強大な王権が生まれたかは、世界史の大きな研究課題である。

歴史学の中心となるはずの文字資料が、モンゴル遊牧王朝に関しては限られている。遊牧民ら自身が記した文字資料が少ないことと、周辺諸国で記されたものにも、遊牧民を蔑視する視点による文字資料が多いため、研究においてそれらを利用する際、史料批判が難しい。そのようなモンゴル遊牧王朝の解明において、物質資料に基づく研究、すなわち考古学的研究はきわめて重要であろう。

モンゴル遊牧王朝の興隆の背景を、鉄と関連させて考えようとする意見がみられるようになった。遊牧民の軍事力を支えたのが騎馬軍団であった。強力な騎馬軍団には優秀な馬だけでなく、優れた馬具、武具、武器も必要だった。それらは鉄で作られていた。つまり、遊牧王朝の勃興には鉄が重要であったということが言えそうである。そこから鉄資源の効率的入手と先進技術の獲得により、強大化に成功したという仮説が立てられた。

しかしながら、従前の学者たちの意見には、モンゴルには鉄資源がない、モンゴルの鉄技術が劣っていた、といった否定的なものが多く、また、実際に考古資料で見つかる資料も乏しく、いわゆる鉄仮説は本格的な議論の俎上にのぼらなかった。

そのような状況は近年変わりつつある。発端は 2011 年にモンゴル国中央部のホスティン・ボラグ遺跡で匈奴時代の製鉄炉が見つかったことであった。この発見以降、鉄器生産に関する重要な知見がつぎつぎに得られ始め、モンゴル遊牧民たちが長年にわたり積極的に鉄生産に携わっていた姿が浮かび上がってきた。モンゴル遊牧王朝の興亡を考える上で、近年、鉄が注目されている。

中世前半の製鉄遺跡

モンゴル高原で鉄使用がみられるのは紀元前 5～前 4 世紀のチャンドマニ遺跡 1 号墓である。副葬品として斧とナイフが出土した。だが、この段階の鉄器生産の技術に関しては、現在のところ明らかになっていない。

紀元前 3 世紀終わりごろに匈奴政権が成立すると、鉄器の出土が急速に増え始める。ただ、モンゴル高原で確実な製鉄の痕跡が認められるのは、前述のように紀元前 2 世紀のことであった。それは地下式の製鉄炉の出現である。

現時点では、発掘によって詳細がわかる匈奴の製鉄遺跡は、東、中央、西モンゴルアルタイ山脈まで分布していることが明らかになりました。これらの検出された製鉄炉は、平面形は方形あるいは隅丸方形を呈し、スラグピットをもつトンネル式であるという共通点がみられるが、細かく見ていくとそれぞれの差異がみられる。このように、遅くとも紀元前 2 世紀ごろに、匈奴の支配域内で鉄生産システムが確立していたことは明らかである。その特徴は製鉄炉でみる限り、匈奴時代の製鉄技術は地下式製鉄炉を用いるもので、中国漢代の中原地域における地上に高炉を築く製鉄技術とは大きく異なっている。

紀元 1 世紀終わりごろに匈奴が衰亡した。権力の空白ができたモンゴル高原には、東南部から東胡に由来する鮮卑が進出してきた。鮮卑に関連する文献史料や考古資料は多くない。とくに製鉄に関してはほとんど不明で、匈奴の鉄生産システムが、どのように鮮卑に引き継がれたのかはわかっていなかった。

アルタイ地区のグング遺跡では円形の製鉄炉が現れた。それによると匈奴時代の製鉄炉は、平面形が方形や横長形を呈していたが、鮮卑期の 2 世紀末～3 世紀になると円形へ変化したことが分かった。

そして、円形炉の製鉄炉が消失するのは 5 世紀ごろであった。円形製鉄炉から石組製鉄炉（6～8 世紀）への変遷が追えた。文献史料に記載された突厥は、アルタイ山脈で鉄を生産によって勢力を蓄え、柔然を滅ぼしたとあった。このような省力的かつ効率的な製鉄技術の獲得が、突厥の勃興と関連しているかもしれない。

突厥からウイグルへと変わる 8-9 世紀ごろ、製鉄炉の構造が箱形炉に変化する。この炉も前者の石組製鉄炉と同じように、数次使用に耐えるものであった。炉の規模自体も地下式製鉄炉や石組製鉄炉と比較すると規模は大きくなり、生産量が増えたと想定できる。立地が従前の川沿いではなく、山奥に変化することも注目できる。

中世後半の鍛冶炉

上記のような変遷をたどり、省力化、効率化、増産化の方向に進んできたモンゴルの製鉄に大きな転換点が訪れた。それは製鉄工程（製錬）が、ウイグル時代の遺跡の製鉄炉を最後に途絶え、替わって鍛造工程に特化した鉄器生産が始まったということである。

10 世紀（契丹）から 14 世紀（モンゴル）の時期にあたる。この時期にはモンゴル高原で製鉄炉がみられなくなった。この理由は、ウイグルの滅亡による専門鉄工人の流出と、契丹によるモンゴル遊牧民の鉄器生産に対する規制にあると理解した。製鉄を自前で行わ

ない代わりに、素材を廃材リサイクルや外来の鑄鉄インゴットに求め、それらから高度な鍛造技術によって製品を生み出すという、鍛造に特化した鉄工スタイルであった。

以上のように、歴代モンゴル遊牧王朝の鉄器生産の在り方と、その通時的変遷とを明らかにすることは考古学的な研究を通してできる。これまで漠然と語られてきた遊牧王朝の興亡と鉄との関係を、具体的に検討する手掛かりができたと考える。